

# 中国人日本語学習者の VN 型二字漢語動詞の習得に関する研究

## VN 型二字漢語動詞の一体性の視点から

周 振、吉 本 啓

### 要 旨

本研究では、中国語母語話者が日本語の漢語動詞を習得する際のメカニズムを解明するために、まず内部構造が“動詞＋名詞 (V+N)”であるような中国語二字動詞（以下 VN 型動詞と呼ぶ）と同形である日本語の VN 型二字漢語動詞を抽出し、VN 型動詞の自他の傾向とその語としての一体性との間の関連性を大規模なコーパスに対する統計調査によって明らかにした。これにもとづき、中国人日本語学習者を調査対象として、VN 型二字漢語動詞の複合語としての一体性という視点から、母語の知識が第二言語習得に与える影響を考察した。

キーワード：離合詞／一体性／漢語動詞／コーパス／中国人学習者／習得

### 1. はじめに

周知のように、日本語には漢語動詞が数多く存在する。しかもその中の大半は、内部構造が“動詞＋名詞 (V+N)”であるような中国語二字動詞（以下 VN 型動詞と呼ぶ）と同形であるもの（例えば、「読書する」と“读书 dúshū”。以下 VN 型二字漢語動詞と呼ぶ）が占めている。中国人日本語学習者がこのような動詞を習得する際に、母語中国語からの影響を受けているかどうかということは、興味深いことである。従来、母語からの影響を明らかにするための方法としては、母語話者と非母語話者の習得状況をそれぞれ考察することが普通に行われているが、国籍の異なる調査協力者たちの募集や被験者の習得レベルの制御など、多くの困難な課題があり、計画通りにはうまく進まないことも少なくない。そこで、本研究では、その代りに、母語の知識に関する考察を大規模なコーパス（その母語によって作成されたもの）に対する統計調査によって行うことにする。

日中同形の VN 型動詞は、中国語においても従来大きな課題として様々な研究がなされてきた。その中で、もっとも論争が激しいのは、VN 型動詞がそもそも語であるかそれとも句（動詞句）であるか（即ち、語としての一体性の強弱）という判定である。例えば、「結婚」の語は日本語において一つの語であるということはいうまでもないが、それと同形の中国語の“结婚 jiéhūn”については、更に「結」と「婚」に分けて考えることも可能であり、“结婚婚姻 jiéchéng hūnyīn（婚姻を結ぶ）”と解釈することも出来る。そのため、“结婚”を一つの語として認めるべきかそれとも“結”と“婚”をそれぞれ独立した語とするほうがいいのかについては、決定することが困難である。また、このような中国語の VN 型動詞には後ろに目的語が取れるもの（例えば、“投资股票 tóuzī gǔpiào（株に投資する）”）と取れないもの（例えば、\*“结婚她 jiéhūn tā（彼女と結婚する）”）とが混在している。

本研究は、大規模なコーパスに対する統計調査によって得られた中国語 VN 型動詞の自他の傾向とその語としての一体性との間の関連性を、中国語母語話者が持つ母語に関する知識の一部とみなし、実際に中国語母語話者が日中同形の日本語 VN 型漢語動詞の自他を習得する際に、そのような母語の知識を利用しているのかということを主な課題として設定し、アンケート調査を行うことによって、それを明らかにするものである。

## 2. 研究課題と研究方法

以上を踏まえて、本研究の研究課題および研究方法を次の表 1 にまとめることが出来る。

表 1 研究課題①、研究課題②及びそれに関する調査

研究課題①	研究課題②
中国語の VN 型動詞は後ろに目的語が取れるかどうかによって二種類に分けられるが、語としての一体性はそれぞれどうなっているのか。	中国人日本語学習者は、日本語の VN 型二字漢語動詞を習得する際に、母語の知識からの影響を受けているかどうか。
コーパスの統計調査	第二言語習得のアンケート調査

課題①は課題②の前提となる。その理由は二点ある。まず、学習者が目標言語のある言語項目を習得する際に母語からの影響を受けているかどうかを他言語を母語とする学習者との比較をせずに論じるためには、その言語項目と関わりのある学習者の母語における言語項目の言語知識（使用状況）を把握する必要がある。具体例で考えると、例えば、「株を投資する」というような誤用が行われた原因を母語からの影響という観点から分析するためには、「投資」と同形である中国語の「投資」の使用状況を明らかにしておく必要がある。中国語の「投資」において、V の「投」と N の「資」は二つの独立した要素であるというよりもむしろ一つの他動詞として使われる傾向が強く、その後ろに目的語が取れるというようなことが判明して初めて、中国語母語話者がこのような知識を日本語の「投資」に当て嵌めようとする可能性が高いと言えるようになる。

さらに、母語からの影響を受ける可能性がもっとも高いと考えられる用例を課題②のアンケート問題に設定することにより、学習者の習得状況をより直接に考察できる。このような用例を抽出する（その詳細は、第 4. 2 節を参照のこと）ためにも、課題①が不可欠である。次の第 3 章および第 4 章では、それぞれ以上の二つの課題をめぐり具体的に論じていく。

## 3. 中国語 VN 型動詞の一体性

中国語の VN 型動詞は従来多くの言語学者によって様々の名称を与えられてきた（王 1946 “仿语”、林 1953 “结合动词”、彭 1954 “可分离词”、陆 1957 “离合词”、吕 1979 “短语词”、など）が、現在より一般的に受け入れられているのは“离合词 líhécí（離合詞）”という用語である。“离合词”の定義について、周（2006）は次のように述べている。“通常我们所说的离合词，主要指那些由两个

字组成的合成词，尤其是由一个单音动词和一个单音名词组成的双音动宾结构。”（例の“离合词”というのは、二つの漢字からなる合成語のことで、特に1音節動詞と1音節名詞からなる2音節“动宾”（動詞的要素V＋名詞的要素N）構造を持っている語を指す。）

中国語のVN型動詞をめぐるもっとも論争が激しいのは、VN型動詞がそもそも語であるかそれとも句（動詞句）であるか（即ち、語としての一体性の強弱）という判定である。今まで主として、語である（刘 1953、林 1953、范 1981、李 1983、など）、句である（王 1946、吕 1979、史 1983、李 1996、など）および語と句の中間にある（张 1982、李 1990、曹 1994、王 2008、など）という三つの主張がなされてきた。しかし、以上の三つの観点を支える研究のほとんどは、限定された用例にしか注目しておらず、ある要因に注目してそれと動詞の一体性との間の関連性を究明できるように中国語VN型動詞を網羅的に考察したものはまだ少ない。

本章では、動詞の後ろに目的語が取れるかどうかによって、中国語のVN型動詞を二種類に分類し、CCLコーパスの現代語部分を用いて、VN型動詞の語としての一体性をそれぞれ考察していく。

### 3. 1 VN型動詞の抽出

まず、繁体字と簡体字の区別を無視して、国立国語研究所が発行した『分類語彙表—増補改訂版』（2004）から、「用の類」（動詞の類）に属する日中同形の日本語のVN型二字漢語動詞をすべて（432個）抽出し、それと対応する中国語のVN型動詞に訳した。

次に、『現代汉语常用词表（草案）』（2008）を利用して、それらのVN型動詞の頻度の順位を調べた。頻度があまりにも低いものはめったにコーパスの中に表れない恐れがあるので、56,008位以降の動詞（『現代汉语常用词表（草案）』（2008）に掲載されていないもの）を排除した。

残ったVN型動詞（計357個）を課題①の調査対象とした。最後に、後ろに目的語が取れるかどうかを基準として、これら357個の動詞を二種類（Sタイプ：後ろに目的語が取れるタイプ、およびNタイプ：後ろに目的語が取れないタイプ）に分けて、それぞれ二つのtxtファイルに入れた。以下に、本研究の調査対象とする両タイプのVN型動詞をいくつか例示する。

Nタイプ（後ろに目的語が取れないタイプ）：

乘车 chénchē（乗車する）、干杯 gānbēi（乾杯する）、代笔 dàibǐ（代筆する）、休学 xiūxué（休学する）、作曲 zuòqǔ（作曲する）、停电 tíngdiàn（停電する）

Sタイプ（後ろに目的語が取れるタイプ）：

亡命 wángmìn（亡命する）、出兵 chūbīng（出兵する）、动员 dòngyuán（動員する）、执笔 zhíbǐ（執筆する）、同意 tóngyì（同意する）、增刊 zēngkān（増刊する）

### 3. 2 使用するコーパス

課題①で使用するコーパスは、北京大学中国語学研究センター（Center for Chinese Linguistics

PKU)によって開発されたCCLコーパスの現代語部分である。CCLコーパスは新聞、雑誌、小説などを含む4.77億字の膨大なデータベースを提供している。このコーパスのネット版([http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl\\_corpus/](http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/))は無料で公開されている。同コーパスは現代語部分と古代語部分とに分けられ、それに合わせて検索したい中国語のパターンを入力するとデータベースの中から指定されたパターンの行が出てくる。

### 3. 3 調査の手法

基本的な考え方は、対象とする各VN型動詞の頻度(Xとする)と各VN型動詞の「V」と「N」の間に“動態助詞「動態助詞」(アスペクトマーカー)”が挿入される各パターンの合計の頻度(Yとする)についてコーパス中で、それぞれ調査することである。これに基づき、VとNの中間に何か挿入されるものが全体に占める割合(割合 =  $Y / (X + Y)$ )を計算する。割合が高いほうが語としての一体性が低く、逆に低いほうが一体性が高いと判断する。同様に、両タイプ(SタイプとNタイプ)に対して、平均割合が高いタイプの方は一体性が低く、低い方は一体性が高いと見なす。

“動態助詞「動態助詞」”というのは中国語の中で動作が進行する段階を表す助詞(刘他 2001)のことである。本課題で使われている動態助詞には“了 le”、“着 zhe”、“过 guo”、“起 qi”、“完 wan”、“成 cheng”、がある。その中で、“完”、“成”は“过”の話し言葉的な表現と考えられる。従って、割合の数式は以下ようになる。

$$Proportion = \frac{\sum_{i=0}^5 x_i}{\sum_{i=0}^5 x_i + x}$$

$x_0, x_1, \dots, x_5$ はそれぞれ、“了”、“着”、…、“成”が動態助詞として挿入されたVN型動詞の頻度を表す。 $\sum_{i=0}^5 x_i$ はそれらの合計である。 $x$ はVN型動詞の頻度を表す。

具体的な実例“读书”を上の数式に導入し、そして正規表現(regular expression)を使って表記すると、次のようなイメージになる。

$$\text{割合} = \frac{\text{读[了着过起完成]书}}{\text{读[了着过起完成]书} + \text{读书}}$$

“[了着过起完成]”は“了着过起完成”の中の任意の1文字を表す。即ち、“读[了着过起完成]书”は、“读了书”“读着书”“读过书”“读起书”“读完书”“读成书”と同様の意味である。

CCLコーパスには、データにアクセスするためのツールとして、作者や作品などによる検索や、簡単な正規表現(例えば、二つの漢字の間に何個の漢字があるかによる検索)などが提供されているが、課題①のようなより複雑な作業を行うためには、これらのツールだけでは限界がある。そこで、本研究では、CCLコーパス現代語部分のオリジナルデータのみを用い、実際に設定した研究課題に合わせて一連のプログラムを開発して処理を進めることにした。具体的には、UNIX OS環境の下で、“cat”、“grep”、“sed”、“sort”、“uniq”、“echo”、“awk”などのツールを使って一連のシェ

ルスクリプト (shell script) を作ることによって、さっきの二つのtxt ファイルを作ったプログラムの中に導入することにより、自動的に各パターンの頻度や平均値などを計算した。

### 3. 4 結果

目的語を取れないタイプ (N タイプ) に属する250個のVN型動詞において、動態助詞がその間に挿入される平均割合は3.60808パーセントで、取れるタイプ (S タイプ) に属する107個のVN型動詞の平均割合は0.970106パーセントである。

S タイプに比べると、N タイプの方が動態助詞が間に挿入される割合が高いという結果が出た。従って、中国語VN型動詞の場合、後ろに目的語が取れるタイプは語としての一体性が高く、一方、後に目的語が取れないタイプの方は一体性が低いという傾向が明らかになった。

また、N タイプに属する250個のVN型動詞の上記の割合の分散とS タイプに属する107個のVN型動詞の割合の分散はそれぞれ0.0042と0.0004になっている。

S タイプに比べると、N タイプの分散は10倍程度であるという結果が出た。従って、中国語VN型動詞の場合、目的語が取れないタイプに比べると、目的語が取れるタイプのほうが一つのまとまりとしての特性が安定しており、V と N の間に他の要素が挿入できない傾向が強いという結果が出た。

### 3. 5 考察

複合語としての一体性が低いことは、図1が示しているように、“读书”のようなVN型動詞は一つのまとまりではなく、“读”と“书”の各々が元々独立した二つの形態素であることを示している。この場合、VN型動詞の内部で、他動詞の“读”は後ろに目的語の“书”(意味役割上の対象)を取ることによって、述語の意味をすでに完結してしまっており、そのために、NタイプのVN型動詞が自動詞に偏る傾向があるのだと考えられる。

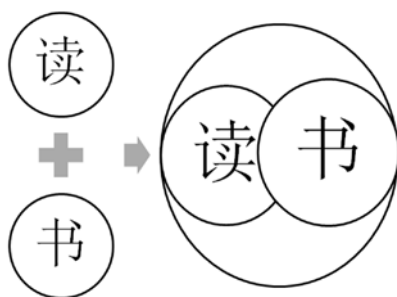


図1 一体性が低い場合

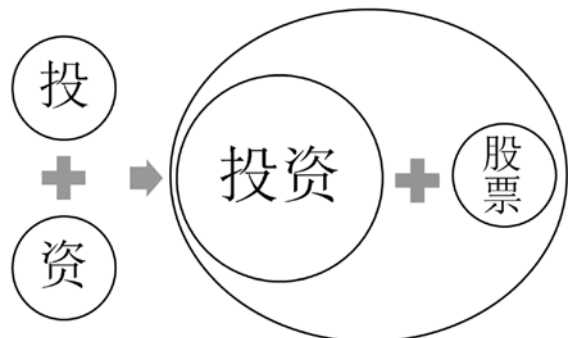


図2 一体性が高い場合

一方、複合語としての一体性が高い“投资”のようなVN型動詞では、図2が示しているように、本当の目的語が動詞の内部に含まれていないので、後に目的語(意味役割上の対象)を取ることを

通じて、述語の意味を完結させるのである。SタイプのVN型動詞は他動詞に偏る傾向があるのはこのためである。

さらに、分散の値を見ると、両タイプのデータの内部のばらつきも視野に入れられるようになる。つまり、Sタイプの方は複合語としての一体性が高いばかりではなく、そのような傾向（VとNの間に他の要素が挿入できないこと）も強くても安定しているようである。それに対して、Nタイプの方は複合語としての一体性が低く、各VN型動詞に対して、VとNの間に他の要素が挿入できるかどうかということは比較的曖昧で、挿入されない傾向はそれほど強くないようである。言い方を変え、Nタイプの場合、全体的に見れば一体性が低いVN型動詞の方が多いが、他方で一体性が比較的の高いVN型動詞も存在しているようである。

中国語の“离合词”が形成された過程と歴史を考えることによって、その原因を知ることができる。元々中国語においては、語という概念が存在するかどうかは曖昧で、史(1996)によると、中国語において語の概念はヨーロッパの言語学により強制的に付け加えられたものに過ぎず、語という概念は中国人が中国語に関する本格的な直感にそぐわない。“离合词”が存在する根源もそこにある(周2006)。即ち、語ではなく字こそが中国語の意味を持つ最小単位である可能性がある。特に、ヨーロッパの言語学がまだ伝来していない時代では、そういう傾向が圧倒的に強い。例えば、中国語の古文（唐詩など）の場合、文があまりにも短いのにに対して、中に含まれた情報は非常に豊富である。それは、一つ一つの漢字に大量の情報が含まれているからである。しかし、近代に入って、外部から言語学の理念を受け入れる一方、意味を持つ要素についての区分も中国語において問題になってくる。

このように、一部のしばしば共起して使用される二つの漢字が一つのまとまりになる傾向がどんどん強くなっていったのである。これこそが“离合词”の形成の過程と言ってよい。課題①の結果からみると、Sタイプの場合は、もはや字から語になるという過程が完成していると言える。一方、Nタイプは、一つの語を成さず、まだ字から語になる途上にあると言うほうが適切であろう。

より詳しく見ると、まだその段階の初期段階にあるものもあれば、すでに最終のフェーズに入っただけのものもある。例えば、“戒心 jièxīn（戒心する）”と“变心 biànxīn（変心する）”の場合、割合の値はそれぞれ0パーセントと20.2648パーセントになっている。だからこそ、課題①の結果が示しているように、Sタイプに比べてNタイプのほうは各VN型動詞の割合の値のばらつきが大きく、データの分布が不規則になっているわけである。

#### 4. 中国人日本語学習者のVN型二字漢語動詞の習得

本章では、以上で見てきた中国語のVN型動詞が持つ特徴を、中国語を母語とする者がその言語に対する言語知識の一部として共通して保持している情報とみなし、実際に中国語母語話者が日中同形の日本語VN型漢語動詞の自他を習得する際に、そのような母語の知識を参照しながら習得を進めていくのか否かを解明するために、アンケートを作成して調査を進めていく。

#### 4. 1 漢語動詞の習得に関する研究

漢語動詞の習得研究は現状では極めて不十分であるが、その一つとして、庵（2008）が挙げられる。庵（2008）は、漢語動詞を対象に動詞の自他の判断に関するアンケート調査を母語話者と中国人日本語学習者に対して行い、形態的に指標を持たない漢語動詞における自他の区別がどのように習得されているかについて考えた。その結果、受身形の習得率はよかったが、使役形はほとんど習得されていなかった。特に、「他動詞に相当する使役形」は全く習得されていなかった。また、非対格自動詞の場合の受身用法が誤用になるという文法事実があまり習得されていないので、非対格動詞の習得率が相対的に劣ると指摘した。

庵（2008）の研究には問題がある。まず、受身形と使役形の用例を使用したせいで、調査文がかなり複雑になり、全体として構文や語彙の難易度などの統一が困難になっている。さらに、何よりも深刻な問題は、アンケートの設計が調査目的にうまく対応できていないことにあると思われる。即ち、受身形と使役形の使用が出来るかどうかということは動詞の自他の判断が出来るか否かということに直接つながっていないのである。例えば、非対格動詞の用例において、受身形の選択肢が選ばれたとしても、学習者が必ずしも用例の動詞が自動詞であるということが判断できなかったとは言えない。なぜなら、日本語には受身形になれる自動詞も存在するからである。従って、自他の区別が出来るかどうかという調査目的をよりシンプルに捉えられるようなアンケートの形式が求められる。

また、庵（2008）を初めとするほとんどの研究は、漢語動詞の自他の習得を母語知識からの影響という視点から考察していないため、中国語母語話者特有の習得状況を視野に入れることが出来ないし、習得実情の背後にある要因に関する分析も十分に行われていないのが現実である。

#### 4. 2 VN型二字漢語動詞の抽出

まず課題①の研究対象である250個のNタイプの中国語のVN型動詞から、VとNの間に動態助詞が挿入される各パターンの合計の頻度（Yの値）が100を超えたもの（一体性が最も低いVN型動詞）と、107個のSタイプから、Yの値が0であるもの（一体性が最も高いVN型動詞）を、それぞれ抽出し日本語のVN型二字漢語動詞に還元する。更に、日本語での使用状況（よく使われている動詞であるかどうか）も考慮し、それぞれ10個ずつ（合計20個）取り出して課題②の調査対象とする。20個のVN型二字漢語動詞の詳細は以下のようである。

Nタイプ：

発光する、読書する、挙手する、献花する、発言する、台頭する、握手する、開国する、点火する、通信する

Sタイプ：

撤兵する、献身する、取材する、提議する、整形する、増資する、閱兵する、増刊する、解体する、

#### 4. 3. 1 制御について

#### 4.3.2 アンケートの形式

106



S- : 中国語で目的語がとれる動詞で且つ調査文で目的語を取らない文

更に、目的語を取っている文と取っていない文をクロスさせながら、40の文を二つのアンケート（アンケートⅠとアンケートⅡ、それぞれ20文）に取り入れた。すなわち、上の調査文(1)がアンケートⅠにある場合は、調査文(2)が必ずアンケートⅡにできるように工夫した。アンケートを二つに分ける理由は、全部で40問もあるので、これを一気に被験者をやらせると負担がかかりすぎる恐れがあるという点にある。アンケートは表紙、中身、謝辞という三つの部分からなっている。

#### 4. 4 被験者

被験者は上海海事大学日本語科の二年から四年までに在籍している中国人日本語学習者69名である。日本語の勉強時間によって初級（26人、二年生）、中級（23人、三年生）、上級（20人、四年生）という三つのグループに分け、アンケートⅠとアンケートⅡをバランスとってランダムに被験者に配って、調査を行った。

#### 4. 5 結果

データの分析について、基本的な考え方は、次の三つのステップに従って、徐々に分析を進めていくことである。

- (1) 四つのタイプの文の自然さの得点の平均を被験者グループごとに計り、縦横の比較を通して三つの被験者グループの共通点と相違点を明らかにする。
- (2) SPSS による分散分析及び多重比較を通して、被験者グループ、動詞タイプ、文の自然さという三つの変数の間に有意差があるかどうか、あるとしたらどこに差があるかということを明確にする。
- (3) (1)と(2)の分析結果を合わせて、中国人日本語学習者の VN 型二字漢語動詞の習得状況を考察する。

次に課題②の結果を示す。四つのタイプの文の自然さの平均値を以下の表2と図3にまとめる。

表2 グループごとの四つのタイプの文の自然さの得点の平均

	初級	中級	上級
N+	0.285	-0.315	-0.479
N-	0.492	0.364	0.400
S+	0.700	0.251	0.383
S-	0.800	0.510	0.704
N+ - N-	0.208	0.679	0.879
S+ - S-	0.100	0.259	0.321

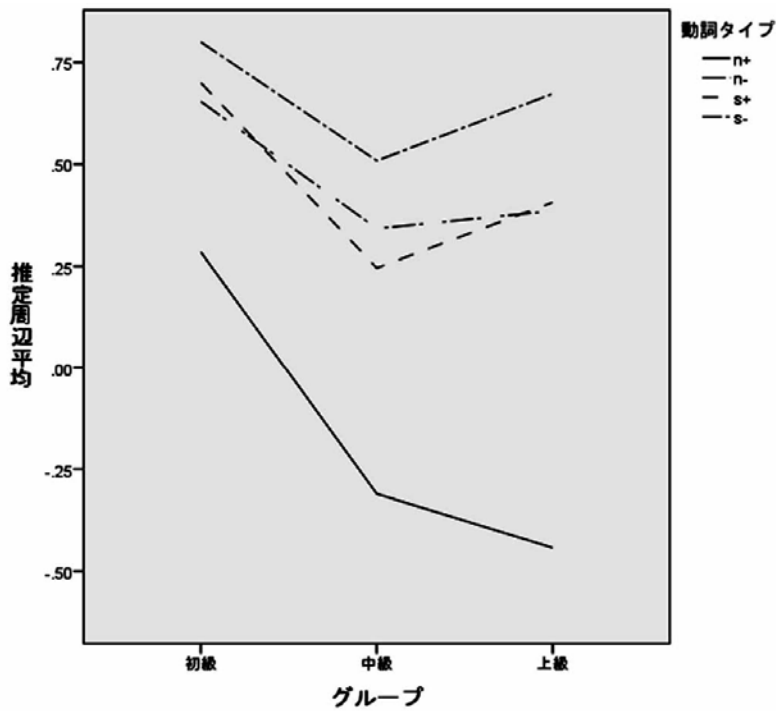


図3 自然さの推定周辺の平均

分散分析の結果を以下の表3に示す。

表3 被験者間効果の検定

従属変数: 自然さ					
ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	185.706 <sup>a</sup>	11	16.882	7.691	.000
切片	170.766	1	170.766	77.791	.000
グループ	48.927	2	24.464	11.144	.000
動詞タイプ	129.825	3	43.275	19.714	.000
グループ * 動詞タイプ	12.331	6	2.055	.936	.468
誤差	3003.026	1368	2.195		
総和	3375.000	1380			
修正総和	3188.733	1379			

a. R2 乗 = .058 (調整済み R2 乗 = .051)

多重比較の結果は以下の表4および表5に示す。

表 4 グループ間の多重比較の結果

多重比較						
従属変数: 自然さ						
Tukey HSD						
(I) グループ	(J) グループ	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
					下限	上限
初級	中級	.41*	.095	.000	.19	.64
	上級	.36*	.099	.001	.13	.59
中級	初級	-.41*	.095	.000	-.64	-.19
	上級	-.05	.101	.853	-.29	.18
上級	初級	-.36*	.099	.001	-.59	-.13
	中級	.05	.101	.853	-.18	.29

観測平均値に基づいています。  
誤差項は平均平方 (誤差) = 2.195 です。  
\*. 平均値の差は .05 水準で有意です。

表 5 動詞タイプ間の多重比較の結果

多重比較						
従属変数: 自然さ						
Tukey HSD						
(I) 動詞タイプ	(J) 動詞タイプ	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
					下限	上限
n+	n-	-.60*	.113	.000	-.89	-.31
	s+	-.59*	.113	.000	-.88	-.30
	s-	-.79*	.112	.000	-1.08	-.51
n-	n+	.60*	.113	.000	.31	.89
	s+	.01	.114	1.000	-.28	.30
	s-	-.19	.113	.322	-.48	.10
s+	n+	.59*	.113	.000	.30	.88
	n-	-.01	.114	1.000	-.30	.28
	s-	-.20	.113	.283	-.49	.09
s-	n+	.79*	.112	.000	.51	1.08
	n-	.19	.113	.322	-.10	.48
	s+	.20	.113	.283	-.09	.49

観測平均値に基づいています。  
誤差項は平均平方 (誤差) = 2.195 です。  
\*. 平均値の差は .05 水準で有意です。

## 4. 6 考察

表 2 について、縦横の比較をしてみると、三つの被験者グループの共通点と相違点が明らかになった。以下のとおりである。

縦の比較 (初級、中級、上級が共通) :

- (1) 「N+」の自然さが一番低い。一方、「S-」の自然さが一番高い。(4つのタイプの比較から)
- (2) N タイプの場合、目的語を取らない方が文の自然さがずっと高い。 (「N+ - N-」と「S+ -

S-」の比較から)

- (3) Sタイプの場合、目的語を取っても取らなくても文の自然さはそれほど変わりがない。([N+ - N-]と「[S+ - S-]」の比較から)

横の比較(初級と中級と上級が相違):

- (4) 被験者のレベルが高ければ高いほど「N+」の自然さが低いと判断している。「N+」の行から)  
 (5) 被験者のレベルが高ければ高いほど、Nタイプの場合、目的語を取らないほうが文の自然さがずっと高いと判断している。「[N+ - N-]」の行から)  
 (6) 被験者のレベルが高ければ高いほど、Sタイプの場合、目的語を取るかどうかはやはり文の自然さに影響を与えると思うようになる。「[S+ - S-]」の行から)

表3が示しているように、自然さの判定について、平均値を比較すると、グループ(レベル)間(F(2, 1368)=11.144,  $p<0.001$ )及び動詞タイプ間(F(3, 1368)=19.714,  $p<0.001$ )で有意な差がある。

グループまたは動詞タイプのどの部分に違いがあるかという点、多重比較の結果(表4および表5)を見ればわかるようにグループの場合は初級と中級、初級と上級の間に差があった(すべて、 $p<0.01$ )が、中級と上級の間には差がなかった。それにしても、図3を見ると中級と上級の部分の直線は傾斜度がそんなに大きくないが、小さいとも言えない(特に「S+」、「S-」の場合)ようである。その原因としては、グループの分け方に問題があると思われる。つまり、今回の調査では日本語の勉強時間だけをグループ分けの基準としたが、上級被験者とされた者も三年間しか日本語の勉強をしていないし、三年間勉強したといっても日本語のレベルが本当に上級に達しているかということも考慮に入れなければならない。これは推測であるが、今回上級グループに含めた被験者の実際のレベルは中級と上級の間だったのではないか。日本語のレベルが今後上がると、上級と中級の間に差が出るか、あるいは超上級学習者になって初めて、中級との間に差が出るのではないかと考える。

さらに、動詞タイプの場合は「N+」と「N-」、「S+」、「S-」との間に差が出た(すべて、 $p<0.001$ )が、「N-」、「S+」、「S-」という三つのタイプの文の間では差が出なかった。これについては、VN型二字漢語動詞と同形の中国語のVN型動詞の状況を考えればその理由がわかる。即ち、中国語において、NタイプのVN型動詞の場合は目的語をとってはいけなないので、中国人日本語学習者は日本語のVN型二字漢語動詞を習得する際に母語の影響を受けて、動詞の前に目的語を取ると文の自然さが低いと判断するのである。

一方、SタイプのVN型動詞の場合は必ずしも目的語を取らなくてもよく、目的語を取っても取らなくてもいいので、被験者は「S+」タイプの文と「S-」タイプの文の自然さを判断する際は、特に違いを感じていないと思われる。それにしても、図3を見るとわかるように、「N-」タイプの文と「S-」タイプの文との差はそれほど目立たないが、被験者グループの違いによらず「S-」タイプの文の自然さが最も高くなっている。それは、先ほど推測したように今回上級グループに分類

された被験者のレベルがまだ本当の上級に達していない可能性が高いことを示唆している。

## 5. まとめ

本研究では、VN型二字漢語動詞の複合語としての一体性という視点から中国人日本語学習者のVN型二字漢語動詞の自他の習得状況を考察した。四つのタイプ（「N+」、「N-」、「S+」、「S-」）の調査文の自然さを比較したところ、「N+」だけが自然さが有意に低く、被験者のレベルが高ければ高いほど「N+」の自然さが低いと判断しているということが明らかになった。また、大規模なコーパスに対する統計調査を行うことによって、VN型二字漢語動詞と同形の中国語のVN型動詞の使用状況が把握できたため、第二言語習得の調査結果を母語の知識からの影響という面で分析できるようになった。即ち、中国語において、NタイプのVN型動詞の場合は、語としての一体性が低く目的語を取れない傾向があるので、中国人日本語学習者は日本語のVN型二字漢語動詞を習得する際に母語の影響を受けて、動詞の前に目的語を取ると文の自然さが低いと判断するのである。

また、今回の調査では、中級学習者と上級学習者の間には有意差が見られず、「N-」、「S+」、「S-」という三つのタイプの文の間にも有意差が示していないが、これは、グループの分け方に問題がある可能性が高いと考えられる。学習者の習得状況をより客観的に捉えられるように、今後被験者グループをより正確に分けて再調査する必要がある。

第二言語習得研究において母語の影響に関する考察が従来盛んに行われてきたが、母語の知識とされるものが実際に被験者の母語体系に存在するのか、それがいったいどのようなものかということに対する実証的な証明と考察が欠けているのが現実である。本研究では、日本語のVN型二字漢語動詞を研究対象として学習者の習得状況の考察を通して、漢語動詞に関する習得研究の空白を一部埋めることが出来ただけではなく、明らかにしたい母語の知識からの影響もコーパスの調査を用いて裏付けた。従来のやり方（母語話者と非母語話者の習得状況をそれぞれ考察していくこと）に比べると、本研究で提唱した調査方法は効率上で勝っている。今後、このような調査方法を様々な言語項目の習得研究に応用することも可能だと思う。

## 参考文献

- 庵功雄 (2008) 「漢語サ変動詞の自他に関する一考察」『一橋大学留学生センター紀要』 11, 47-63.  
 国立国語研究所編 (2004) 『分類語彙表一増補改訂版』大日本図書.  
 曹乃玲 (1994) 离合词浅说『吴中学刊』 2: 83-84.  
 范晓 (1981) 怎样区别现代汉语的词同短语『东岳论丛』 4: 104-111.  
 李大忠 (1996) 『外国人学汉语语法偏误分析』北京语言学院出版社.  
 李临定 (1990) 『现代汉语动词』中国社会科学出版社.  
 李清华 (1983) 谈离合词的特点和用法『语言教学与研究』 3: 91-100.  
 林汉达 (1953) 动词连写问题『中国语文』 10: 9-10.  
 刘泽先 (1953) 用连写来规定词儿『中国语文』 3: 10-11.  
 刘月华・潘文娛・故韡 (2001) 『实用现代汉语语法』商务印书馆.  
 陆志韦 (1957) 『汉语的构词法』科学出版社.

- 吕叔湘 (1979) 『汉语语法分析问题』商务印书馆.
- 彭楚南 (1954) 两种词和三个连写标准『中国语文』 4: 3-9.
- 史有为 (1996) 词类问题的症结及其对策 胡明扬编 『词类问题考察』北京语言大学出版社.
- 史有为 (1983) 划分词的普遍性原则和系统性原则『语法研究和探索』北京大学出版社.
- 王会琴 (2008) 离合词的研究及作用『襄樊职业技术学院学报』 4: 119-121.
- 王力 (1946) 『汉语语法纲要』开明书局.
- 《现代汉语常用词表》课题组编 (2008) 『现代汉语常用词表 (草案)』商务印书馆.
- 张理明 (1982) 论短语动词『语文研究』 1: 86-91.
- 周上之 (2006) 『汉语离合词研究—汉语语素、词、短语的特殊性』上海外国语教育出版社.